第二章　研究の概要

1　研究開発課題(テーマ)について

〈本学園の研究開発課題〉

幼小中一貫の教育力を生かした社会のグローバル化・高度情報化・超少子化の進展に対応する国際的コミュニケーション能力の育成を中心とした21世紀型学校カリキュラムの研究開発

この研究開発課題は，広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校において平成10年度より行ってきた幼小中一貫教育研究の理念に基づき，21世紀の様々な社会情勢の中で生きていく子どもたちにとってこれから必要とする学力は何かを明らかにし，その学力を確実に身につけるための幼小中段階での学校カリキュラムはどうあるべきかを研究しようとするものである。

「幼小中一貫の教育力」は，第一章の１．で述べた通り，本学園の長年の教育の理念であり，成果である。この５年間の研究の中で，私たち教職員が，幼小中12年間のスパンで子どもを見つめながら一貫して子どもの教育に当たることで，子どもたちは人とかかわり合いながら生活したり学んだりすることを繰り返し，身近な人とかかわり合う力を確実に身につけてきた。そこで，この研究開発においても，今までの研究の成果である「幼小中一貫の教育力」を最大限に生かしながら研究を進めたいと考えている。

また，私たちは，21世紀の社会が直面している社会的な課題にも目を向け，21世紀を生きる子どもたちのための教育を研究しようとしている。そこで，私たちの研究の中心に，社会のグローバル化・高度情報化・超少子化に対応するための学力としての，「国際的コミュニケーション能力」を位置づけた。私たちは，「国際的コミュニケーション能力」を，「確かな語学力を基に様々なメディアを駆使して，多文化を理解したり，人々と国際的にコミュニケーションしたりする能力」ととらえている。

そして，この「国際的コミュニケーション能力」を中心として，その他にも考えられる21世紀に必要とされる学力は何かを明らかにし，本学園の子ども達がそれらの力を確実に身につけることができるための本学園の学校カリキュラム全体の姿を研究の中で生み出し，「21世紀型学校カリキュラム」として提案する。

2　子どもにつけたい力

(1) 本学園の21世紀型学力観

今日学力をどうとらえるかについて，様々な定義がなされている。その中で本学園では，この研究で子どもたちにつけようとしている21世紀型学力を次のようにとらえ，２つの視点からその意味を具体化しようとしている。

〈附属三原学園の21世紀型学力のとらえ〉

三原学園の子どもたちが大人になり，保護者となる21世紀初頭(2015～2025年あたり)に生きてはたらく学力

↓

〈附属三原学園の21世紀型学力の２つの視点〉

①本学園の自伸会の３つの信条に述べられている，

１．私たちは私たちの力で伸びていこう。	(自主性)
１．私たちは人のために尽くして感謝しよう。	(連帯性)
１．私たちは私たちのきまりを尊重しよう。	(自律性)

を具現化するために必要な力という視点

②附属三原学園の子どもたちが，21世紀初頭に直面する課題を克服するために必要な力という視点

本学園の「自伸会の３つの信条」に述べられている自主性・連帯性・自律性の理念は，どのような時代においても人間にとって大切な普遍的資質である。つまりこの資質は，今を生きる子どもたちにとって，20世紀だけでなく21世紀においても必要不可欠なものである。そして，この理念を具現化しながら生きていくためには，教育の場において一人ひとりの子どもが自分の学習を主体的に進めていくことができる自己教育力や，人間関係力といった人と豊かにかかわる力を育てる必要がある。

また，グローバル化・高度情報化・超少子化などの21世紀の社会情勢の中で生きていく子どもたちは，20世紀には考えられなかった様々な課題に直面することが考えられる。そこで，その課題を解決するために生きて働く力が必要となる。国際社会においては極めてグローバルな関係での人とのかかわりを要求されるであろうし，高度情報化社会においてはコンピュータをはじめとするマルチメディアを駆使する力が必要とされるであろう。また，超少子化の社会においては，希薄な人間関係の中でますます人と豊かにかかわり合うことが大切になるであろう。そして，21世紀に直面するであろう課題を解決する子どもたち一人ひとりに，課題解決のための具体的な方法や，課題を解決するのに必要となる基礎的基本的な教科学力を，確実に身につけさせることも大切である。

以上のことから私たちは，附属三原学園の21世紀型学力を具体的に次の３つの力と設定した。

〈子どもにつけたい３つの21世紀型学力〉

① 国際的コミュニケーション能力

② 21世紀型教科学力

③ 人間関係力

これら子どもにつけたい３つの21世紀型学力は，21世紀の社会を生きていくために必要な力であり，21世紀の課題を解決するために生きて働く力である。よって，学んで身につけただけの力や，単にテストで数値化したり測定したりすることができるような力ではないことは言うまでもない。

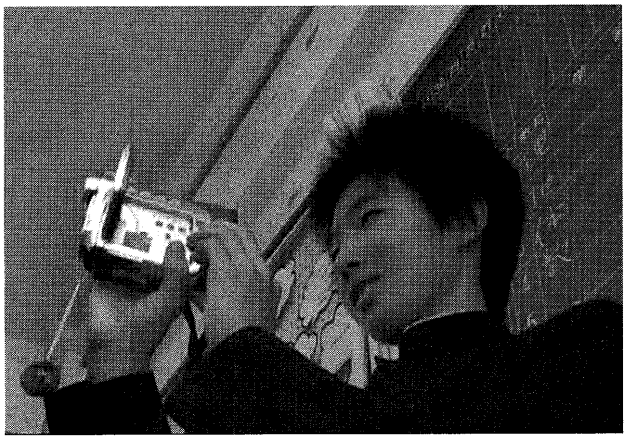
(2) 子どもにつけたい3つの力

①国際的コミュニケーション能力

21世紀のグローバル化・高度情報化の進展した社会において，そこに生きる人間が直面する課題を解決

しながら生きていくための土台として考えられるのは「国際的コミュニケーション能力」である。

本学園では，国際的コミュニケーション能力を「確かな語学力を基に，様々なメディアを駆使して多文化を理解したり，人々と国際的にコミュニケーションしたりする能力」ととらえた。具体的には豊かな外国語会話能力や多文化理解の力，情報活用能力や情報の科学的理解や多角的判断能力，メディア社会に参画する能力や態度などがあげられる。



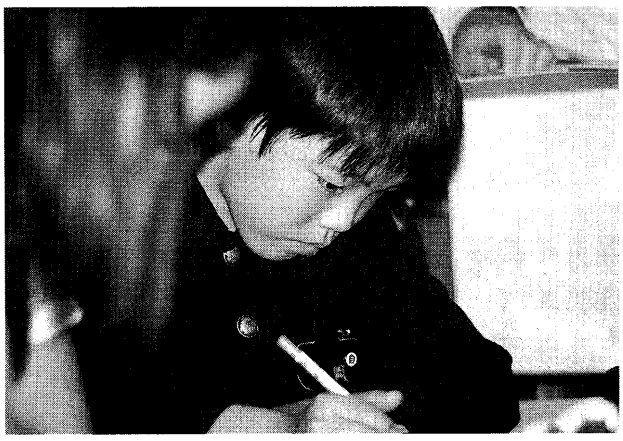
「国際的コミュニケーション能力を育てる」

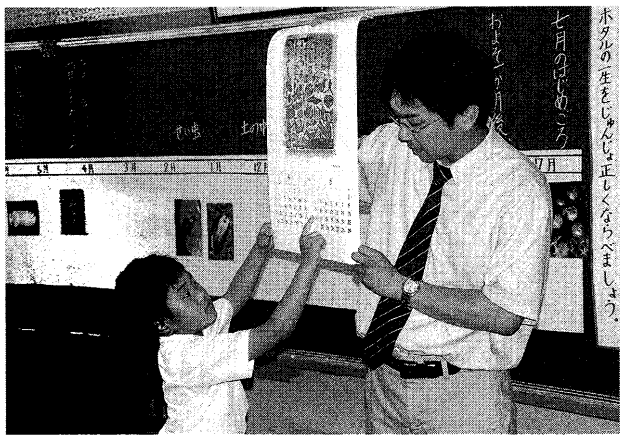
②21世紀型教科学力

子どもたちは，21世紀の社会情勢の中で起こる課題に直面したとき，それらを主体的に解決するために，どのような教科学力を必要とするのであろうか。

本学園では，「21世紀型教科学力」を「21世紀初頭の社会の変化に対応することができる確かな教科学力」ととらえた。そしてその内容を各教科ごとに具体化することにした。また，私たちはこれらの教科学力を子ども達が確実に身につけるために，幼少期から小学校低学年ごろに必要な基礎的な教科の力は何かを明らかにしようと考えた。

また，この21世紀型教科学力は，現在から将来にわたって必要と考えられる教科での学力をさすものであり，現在の学習指導要領などで示されているものを含めた時代が変わっても変わらない不易な学力という側面と，21世紀の新たな社会情勢の進展に対応するための新しい教科学力といった側面の２つを持つものである。





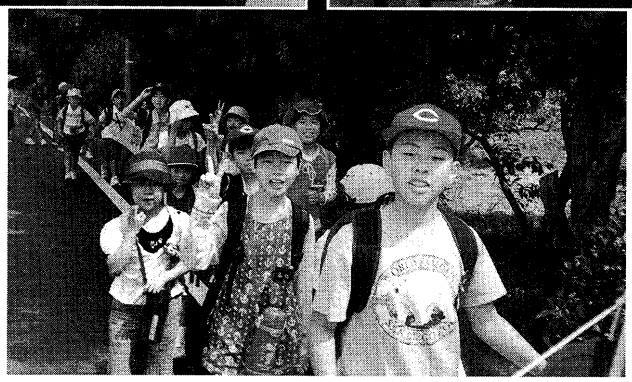
「21世紀型教科学力を育てる」

③人間関係力

私たち人間は，常に他者とかかわりながら生きている。いつの時代においても「人と人とのかかわり」は，人間が社会の中で生きていく上で大切な要素であるといえるだろう。このことを本学園でも大切に考えており，平成10年度以降「人と人とのかかわり」をテーマに掲げて研究を進めてきたのである。また，本学園での長年の教育理念である自伸会の信条でも述べられている自主性・連帯性・自律性も，人と人とのかかわりに大きく結びつくものである。そして，特に21世紀のグローバル化・高度情報化・超少子化の

進展した社会においては，人と人との実際的なかかわりが一層大切にされなければならない。

そこで，私たちは21世紀型学力の３つ目として「人間関係力」を掲げた。そしてその意味を「広い視野に立ち，より直接的・体験的に他者や集団と豊かにかかわり合う力」とし，具体的には広い視野に立ったものの見方や考え方を相互に学び合うこと，かかわりを生み出そうとする力や態度，自分の感情をコントロールしながら人間関係を調整していく力などを考えている。21世紀の人と人とのかかわりは，かかわる対象がより国際的になるであろうし，かかわる方法も高度情報化社会においてより多様化するであろう。しかし，その中において私たちは，直接的な人と人とのふれあいを通して人間関係を深めることを大切にしようとしている。



「人間関係力を育てる」

3 本学園が構想する21世紀型学校カリキュラムの概要

(1) 21世紀型学校カリキュラムの全体像

本学園が構想する21世紀型学校カリキュラムの概要を図にしたものが，右の図１である。このカリキュラムの中で，国際的コミュニケーション能力・21世紀型教科学力・人間関係力を総合的に育てていくことを構想している。

さて，このカリキュラムの大きな特徴は，現行の学習指導要領には含まれない新領域として，領域「国際コミュニケーション」を設けたことである。この新領域は，本学園が21世紀に必要な中心的な力であると考えた国際的コミュニケーション能力を子ども達に育てるためのものであり，本学園のカリキュラムの中心をなすものである。そしてカリキュラム全体を，新領域「国際コミュニケーション」，「保育・教科学習」，「かかわり学習」の３つの柱で構成した。これら３つの具体的内容は，この項の(２)で述べる。

このカリキュラムは，幼小中12年間のうち，前半の幼稚園年少～小学校第３学年までの６年間を幼小連携の期間，後半の小学校第４学年～中学校第３学年までの６年間を小中連携の期間と設定している。幼小中での一貫教育を２期に分けることで，連携を幼小・小中の２校種の連携として設定できるため，幼小中一貫教育をよりスムーズかつシンプルに実践することができると考えている。

また，カリキュラムを２つの期に分けるにあたって，小学校第３学年と第４学年の間に区切りを入れたことも，このカリキュラムの特徴的な部分である。これは，子ども達が小学校第３学年の９歳前後の段階までに体験的・基礎的な学習を大切にする必要があり，そのことが10歳以降の子ども達の学力の習得に大

きくかかわると考えたからである。

全国の小中一貫教育を行っている多くの学校が，発達心理学の考えなどから「4・3・2」の区分，すなわち小学校第1～4学年，小学校第5～中学校第1学年，中学校第2～3学年といったカリキュラムの区切りを構想し，実践を行っている。しかし，本学園では，小学校第3学年に焦点を当てて区切りを入れ，一般的には1年早いと思われる小学校第4学年から教科担任制による学習を導入するなどの教育を行うことで，子どもたちの成長をより早い時期から引き伸ばそうと考えているのである。

本学園の21世紀型学校カリキュラムの全体像

<table>
<tr><th></th><th></th><th>年少　年中　年長</th><th>小1　小2　小3</th><th>小4　小5　小6</th><th>中1　中2　中3</th></tr>
<tr><td rowspan="2">国際コミュニケーション</td><td>国際交流学習</td><td>自国文化・人とのコミュニケーションを大切にした保育</td><td>多文化理解を中心とした学習</td><td>コミュニケーションスキルの向上を中心とした学習</td><td>コミュニケーションスキルを生かした多文化理解の学習</td></tr>
<tr><td>マルチメディア学習</td><td>メディアに出会う保育</td><td>メディアに親しむ活動</td><td>メディアを具体的に活用する活動</td><td>情報の科学的な理解に基づくメディアの体験的活動</td></tr>
<tr><td rowspan="11">保育・教科学習</td><td rowspan="11"></td><td colspan="2">＜学級担任制および体験学習を中心とした基礎的な学習＞</td><td colspan="2">＜教科担任制による確実な学力向上をめざした発展的な学習＞</td></tr>
<tr><td rowspan="10">保育
・総合的な活動</td><td>国語科</td><td>国語科</td></tr>
<tr><td rowspan="2">生活科</td><td>社会科</td><td>社会科</td></tr>
<tr><td>理科</td><td>理科</td></tr>
<tr><td>算数科</td><td>算数科</td><td>数学科</td></tr>
<tr><td rowspan="3">表現科
・音楽的領域
・美術的領域
・総合的表現領域
（音楽的・造形的・身体的・言語的表現）</td><td>音楽科</td><td>音楽科</td></tr>
<tr><td>図画工作科</td><td>図画工作科</td><td>美術科</td></tr>
<tr><td></td><td>家庭科</td><td>技術科
英語科</td></tr>
<tr><td>体育科</td><td>体育科</td></tr>
<tr><td rowspan="5">かかわり学習</td><td>道徳</td><td>道徳性の芽生え</td><td>道徳</td><td>道徳</td></tr>
<tr><td>特別活動</td><td rowspan="3"></td><td>特別活動</td><td>特別活動</td></tr>
<tr><td>総合的な学習の時間</td><td>生活科</td><td>総合的な学習の時間</td></tr>
<tr><td>クラブ活動</td><td></td><td>クラブ活動</td></tr>
<tr><td>学校行事</td><td colspan="3">学校行事（学園行事，自伸会活動）</td></tr>
</table>

〈図1　本学園の21世紀型学校カリキュラムの全体像〉

〈表1　本学園の平成15年度教育課程〉

広島大学附属三原幼稚園　平成15年度「国際コミュニケーション」教育課程

〈年少児（3歳児）〉

1　期	2　期	3　期	4　期	合　計
2日	3日	4日	3日	12日

〈年中児（4歳児）〉

5　期	6　期	7　期	8　期	合　計
3日	5日	5日	4日	17日

〈年長児（5歳児）〉

9　期	10　期	11　期	12　期	13　期	合　計
3日	5日	5日	4日	3日	20日

広島大学附属三原小学校　平成15年度　教育課程

	教　科										教科外（かかわり学習）			国際コミュニケーション		
学年	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	表現	体育	家庭	道徳	特別活動	総合	国際交流	マルチメディア	合計
1年	255		114		85			146	80		34	34	16	45	23	832
2年	263		155		88			150	80		35	35	16	40	30	892
3年	218	70	150	70		60	60		90		35	35	70	35	35	928
4年	218	85	150	90		60	60		90		35	35	70	35	35	963
5年	163	90	150	95		50	50		90	60	35	35	75	35	35	963
6年	160	100	150	95		50	50		90	55	35	35	75	35	35	965

広島大学附属三原中学校　平成15年度　教育課程

	教　科									選択教科	教科外（かかわり学習）			国際コミュニケーション		
学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	体育	技術家庭	英語		道徳	特別活動	総合	国際交流	マルチメディア	合計
1年	120	105	105	105	45	45	90	50	105	0	35	35	70	35	35	980
2年	85	105	105	105	35	35	90	55	105	70	35	35	50	35	35	980
3年	85	85	105	80	35	35	90	30	105	105	35	35	85	35	35	980

(2) カリキュラムの3つの柱

①新領域「国際コミュニケーション」

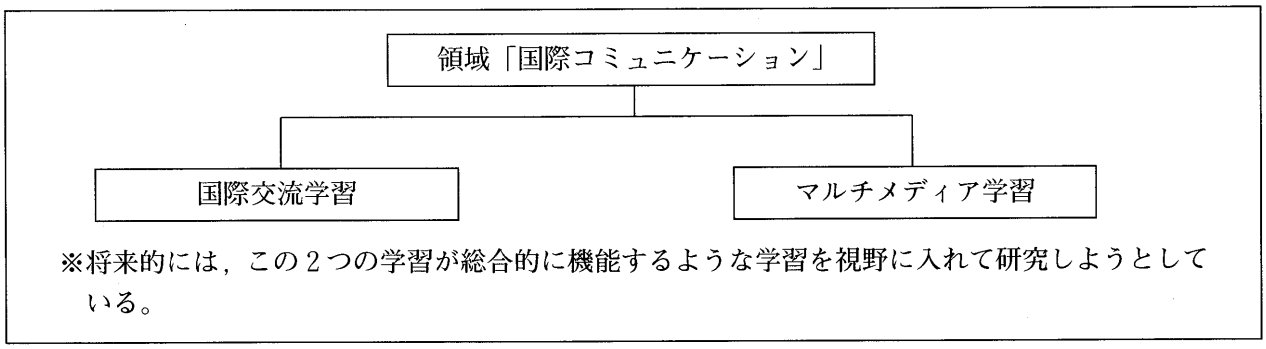
新領域「国際コミュニケーション」は，従来の教育課程を再編し，国際化社会・高度情報化社会に対応する国際的コミュニケーション能力を育成するために，本学園が新設したものである。この新領域は，「国際交流学習」および「マルチメディア学習」の２つの学習内容に分かれている。

国際交流学習は，幼稚園年少～中学校第３学年の子どもたちに，「多文化理解」と「外国語(特に英語)を中心としたコミュニケーションスキルの向上」を視点とした保育・学習を展開するものである。小学校における英会話学習はこの国際交流学習に含まれ，小学校第１学年から行われる。特に小学校第４学年からは，中学校の英語科のカリキュラムなどを意識した英会話学習を行う。

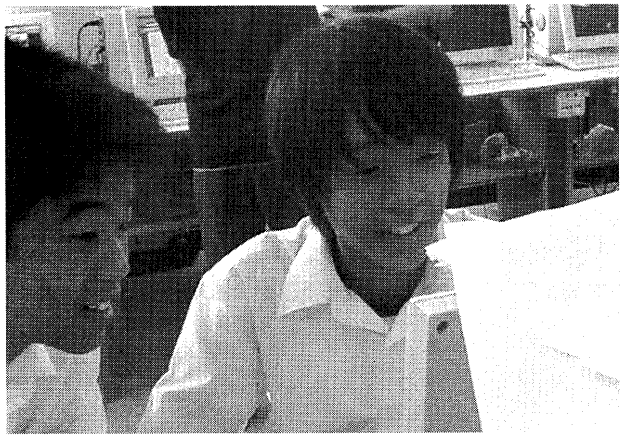
マルチメディア学習は，コンピュータやテレビ・新聞などの様々なメディア学習を通して，情報活用能力の獲得に向け，メディアに出会い，メディアに親しみ，メディアを具体的に活用し，情報の科学的な理解を深めながら体験的活動を行うものである。この学習では，コンピュータリテラシー，メディアリテラシー，情報の科学的理解などについて子どもの発達段階に応じた学習を展開する。

また，本学園の国際的コミュニケーション能力を育成するための学習は，例えば英語教育とコンピュータリテラシー教育といったような区分けをして育てようとしているものではなく，確かな語学力を基にメディアを駆使しながら活動が展開されることをめざしている。そこで，現在国際交流学習とマルチメディア学習は２つに分かれているが，将来的には２つの学習が総合的に展開されるような保育・学習のカリキュラムを開発することを視野に入れて研究を進めている。

領域「国際コミュニケーション」にかかる保育時数は，年間で年少12日程度，年中17日程度，年長20日程度であり，これを各期にバランスよく配置するほか，日常の保育の中でも環境を設定するなどの工夫を行い，常にこの領域を意識した保育ができるようにしている。また，小学校及び中学校の授業時数は，年間68～70時間とし，小学校では週２時間，中学校では年間を通して計画的に時間を配置している。
(表１．参照)



「国際交流学習」


「マルチメディア学習」

②保育・教科学習

保育・教科学習は，幼小中12年間を２つのまとまりに区分けして，それぞれの保育・学習のあり方を研究し，カリキュラムを構築しようとしている。まとまりの前半は，幼稚園年少～小学校第３学年までの６年間であり，学級担任制を中心とした基礎的・体験的な学習を行うための幼小連携の期間としている。また，まとまりの後半は，小学校第４学年～中学校第３学年までの６年間であり，教科担任制による確実な学力の定着や発展的な学習を行うための小中連携の期間と設定している。

幼小連携の保育・教科学習は，幼稚園における３年間の保育で培った子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムを作成し，幼小間のつながりを意識した保育・学習の試みを行う。特に今年度は，保育の表現・言語領域と小学校の音楽科・図画工作科・国語科・体育科などの学習内容を連携させた総合的な表現の学習を行う「表現科」の設置(小学校第１・２学年)や，幼稚園での経験をつなぐ生活科・理科・社会科などの学習を中心に研究を行う。

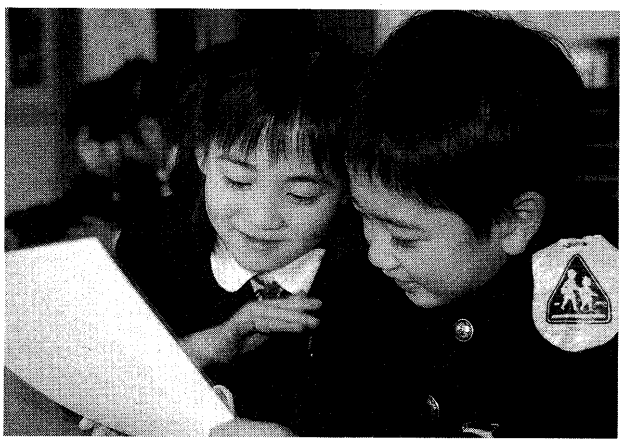
小中連携の教科学習は，小学校第４学年から教科担任制を導入することにより，子どもたちの学力の確実な定着・向上をめざすものである。特に，本学園でつけようとしている「21世紀型教科学力」を各教科で設定し，その定着に向けての学習を各教科ごとに行おうとしている。ここでは，小中の指導者が交流したり乗り入れしたりすることにより，より専門的・発展的な学習ができるものと考えている。

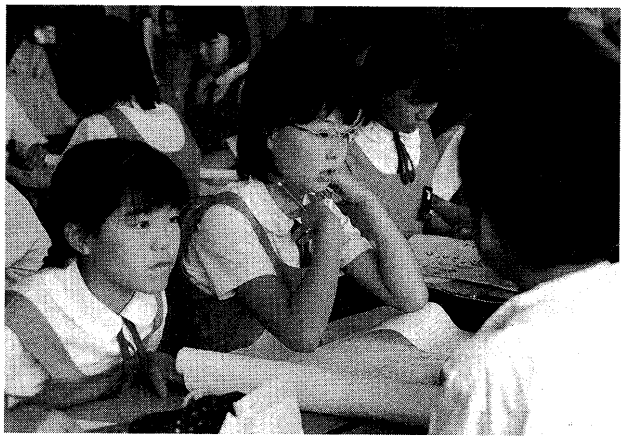
保育・教科学習

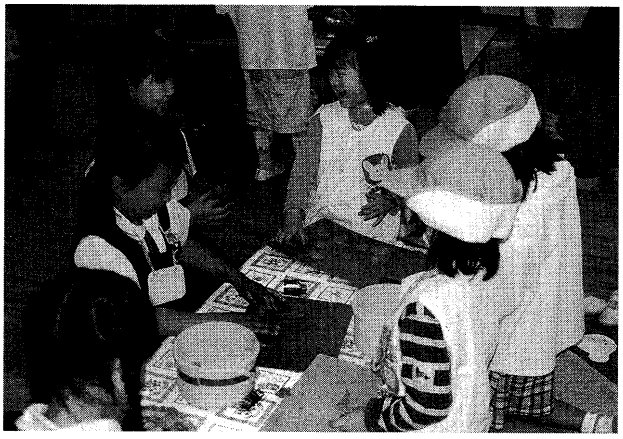
〈幼稚園年少～小学校第３学年〉
幼小連携による
学級担任制を中心にした
基礎的な学習

→

〈小学校第４学年～中学校第３学年〉
小中連携による
教科担任制を中心にした
発展的な学習







保育・教科学習

③かかわり学習

主に21世紀の社会情勢としてあげられる超少子化の進展に対応して，子どもたちに身につけさせたい人間関係力を支えるものとしての社会性を育成するために，道徳・特別活動・総合的な学習の時間・クラブ活動・学校行事の学習や活動における「他者や集団に直接的にかかわり合うことで，他者や集団と豊かにかかわる力を身につける学習」をかかわり学習として位置づけている。

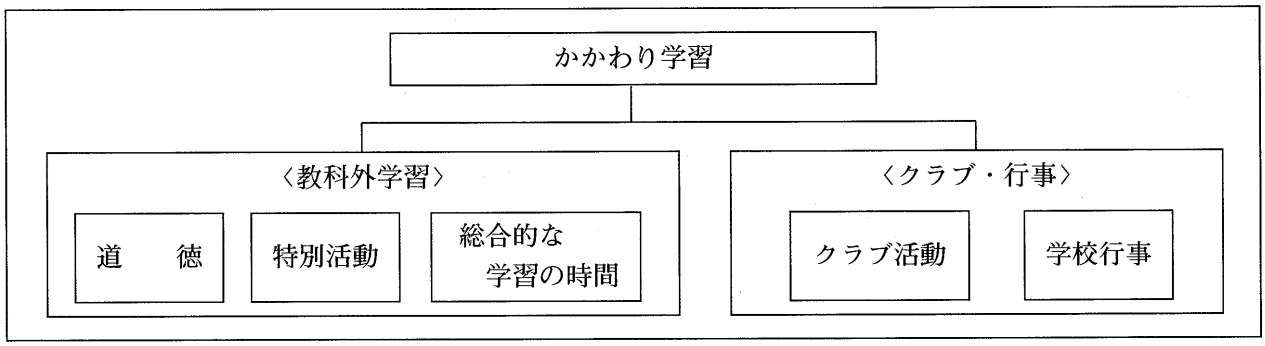
かかわり学習は，道徳・特別活動・総合的な学習の時間である「教科外学習」と，クラブ活動・学校行事を含んだ「クラブ・行事」の２つのまとまりに分けて，それぞれの学習・活動において社会性を育成しようとしている。これらの学習・活動は，本学園の自伸会の３つの信条を具現化し，さらに平成10年度からの本学園の一貫教育研究の成果を引き継ぐ内容となっており，本学園の教育理念を象徴するものとも言える。

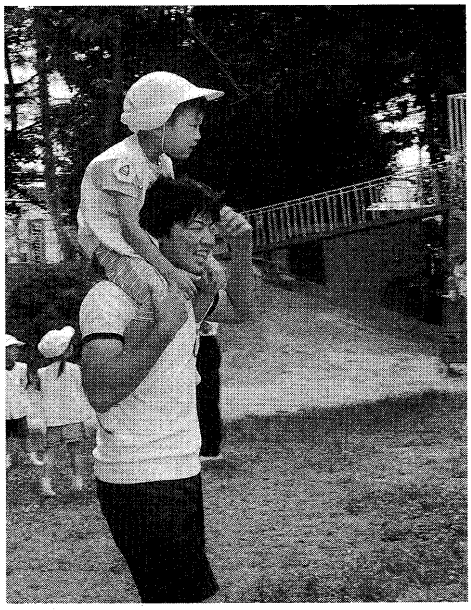
教科外学習では，道徳・特別活動・総合的な学習の時間それぞれの関連を意識した学習の展開や，異校種・異学年交流活動を取り入れることを通しての感動体験を重視した学習を行い，その中で「他者や集団と豊かにかかわる力」を育てることで，「まわりのことを考え，適切に判断し，行動化できる子ども」を

めざそうとしている。

将来的には，道徳では，幼稚園の「道徳性の芽生え」の時期，小学校第１～３学年，小学校第４学年～中学校第３学年までの３期に分けたカリキュラムを構想する。また，特別活動では小学校～中学校までの９年間を，総合的な学習の時間では小学校第３学年～中学校第３学年までの７年間を区分として，カリキュラムを構想する。

クラブ・学校行事の活動では，小学校第４学年～中学校第３学年までのクラブ活動の連携，小学校・中学校の自伸会活動(児童会・生徒会活動)の連携，学校行事(学園行事)の連携を行うことで，子どもたちにかかわり合う力やマネジメント能力を育成しようとしている。この活動においても，一貫教育の視点から，異校種・異学年交流活動を取り入れる中で，学園全体の文化・スポーツ活動をより豊かにし，子どもの心とからだを成長させようとしている。



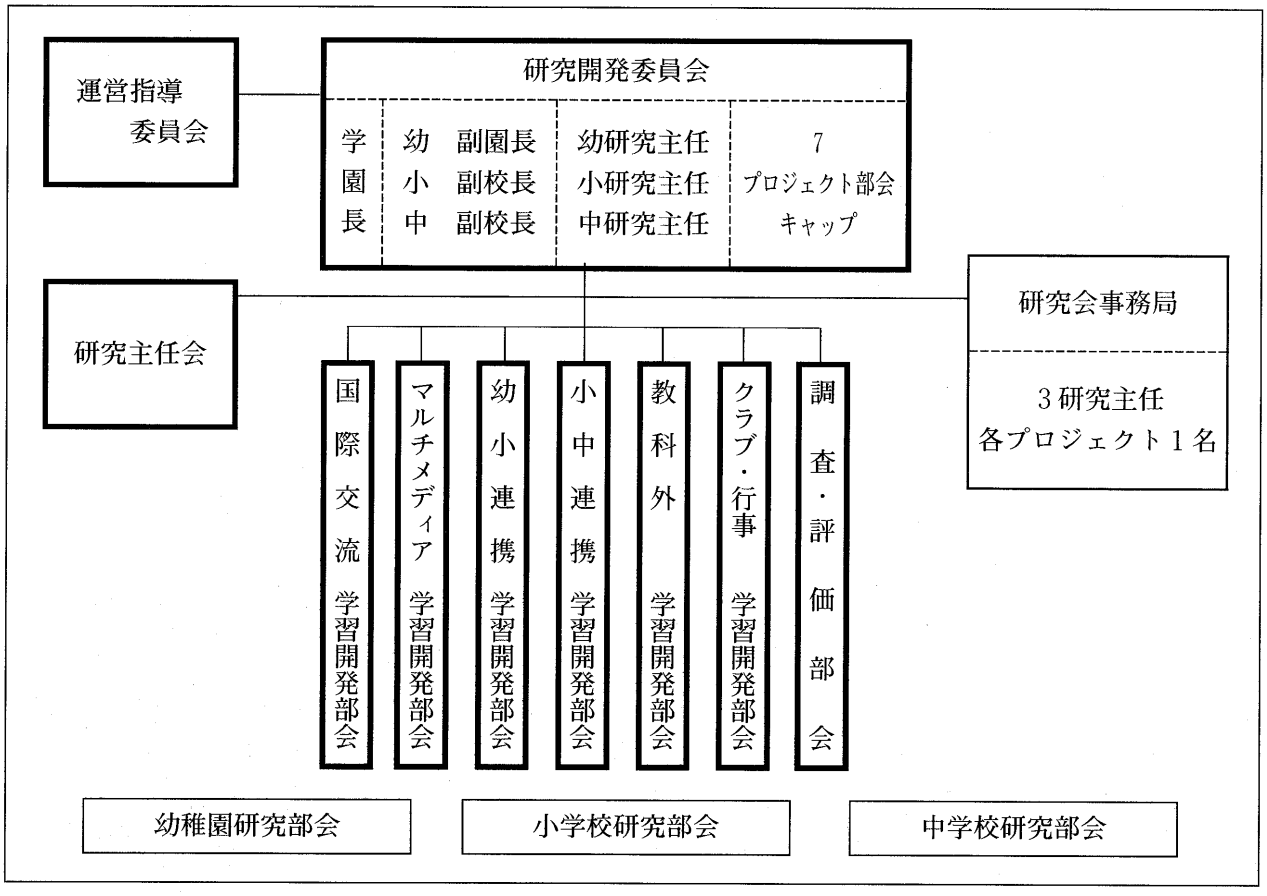


かかわり学習

4 研究組織

(1) 研究組織の概要

本学園の研修組織は，図2に示したとおりである。



〈図2　研究組織〉

この組織の中で，太枠で示した部分が学園研究に関わる組織の中心である。幼稚園・小学校・中学校の各部会は，各校園独自の研究計画などに基づいて各校園の独自性を生かした研修を行うためのものである。また，研究会事務局は，学園研究の推進とは別に，各年度の研究会を運営するための事務的な仕事内容を担うものである。

(2) 7つのプロジェクトによる学習開発

本学園の研究推進に当たっては，研究を中心となって推進していく組織として7つのプロジェクト部会を設け，それぞれのプロジェクト部会が独自の研究を推進することができるようにしている。各プロジェクト部会は，全て広島大学教官との共同プロジェクトによる研究体制をとっており，1つの学園の中で7つのプロジェクト研究が同時に行われている。そして，この7つのプロジェクト部会の中に，本学園の幼・小・中の教職員が分かれて所属している。また，プロジェクト部会への所属の方法として，幼小連携・小中連携学習開発部会のいずれかに所属しながら，他の5つの部会の1つにも所属する仕組みとなっている。

国際交流学習開発部会及びマルチメディア学習開発部会は，21世紀の社会を生きていくために必要な国際的コミュニケーション能力の育成をめざすための学習開発を行う部会である。具体的には，国際交流学習を通して多文化理解やコミュニケーションスキルの向上を図るとともに，マルチメディア学習を通して情報活用能力・情報の科学的理解及び多角的判断能力・メディア社会に参画する能力及び態度などを育むための，幼小中一貫教育カリキュラムの作成と学習指導のあり方の研究開発を行う。

幼小連携学習開発部会では幼稚園～小学校第３学年までの体験を重視した学級担任制による保育・教科のあり方について，小中連携学習開発部会では小学校第４学年～中学校第３学年までの教科担任制による教科学習のあり方について，それぞれ幼小・小中が一貫したカリキュラムの作成と保育・学習指導のあり方の研究開発を行う。この２つの学習開発部会で主に身につけさせようとしている21世紀型学力は21世紀型教科学力であり，その具体的な学力の設定及びそれらの力の定着に向けての学習方法のあり方の研究を行う。

教科外学習開発部会及びクラブ・行事学習開発部会は，人間関係力を育成するために，教科外学習(道徳の時間・特別活動・総合的な学習の時間)やクラブ活動・学校行事・自伸会活動(児童・生徒会活動)において感動体験を重視した「かかわり学習」を展開するための幼小中一貫教育カリキュラム及び指導のあり方についての研究開発を行う。

調査・評価部会は，研究全体の評価計画を作成するとともに，子どもの実態調査や教職員の研究の実態などの調査を行い，研究の推進に寄与するものである。

研究開発組織一覧表

運営指導委員会				共同研究プロジェクトチーム		
領域名	他大学	広島大学	県・市 教育委員会	部会名	広島大学	本校教職員 ○は，部会キャップ
国際コミュニケーション	大阪教育大学 田中　博之	石井　眞治 三浦　省五 二宮　皓		国際交流学習開発部会	深澤　清治	幼：岡野・松島 小：江本・中山・林原・奥井 中：○松尾・桑田・居川
				マルチメディア学習開発部会	山本　透	幼：金岡・岡本 小：三田・見藤・横村 川上 中：○簑島・作田・大和
保育・教科	岐阜大学 教育学部 北　俊夫	森　敏明	広島県 教育委員会 指導第一課長 二見　吉康	幼小連携学習開発部会	井上　弥 朝倉　淳	幼：○松島・池田・岡野 岡本・金岡 小：○石井・見藤・江本 下野・吉原・中山 奥井・横村
				小中連携学習開発部会	(国)山元隆春 (社)池野範男 木村博一 棚橋健治 (算・数) 植田敦三 (理)山崎敬人 (英)松浦伸和 (音)野村幸治 (図・美)若元澄男・菅村亨 (技)山本　透・濱賀哲洋 (家)田結庄順子 (保・体)松田泰定　木原成一郎　松尾千秋	小：○八島・杉川・岡 宮里・上野・村上 宮本・三田 中：○大和・柳生・林 作田・岡原・二畑 簑島・風呂・木本 松尾・居川・桑田
かかわり学習	千葉大学 教育学部 天笠　茂	角屋　重樹	三原市 教育委員会 教育長 植木　章弘	教科外学習開発部会	越智　貢 林　孝 神山　貴弥	小：○杉川・村上・下野 上野・八島・宮里・東 中：二畑・荒谷
				クラブ・行事学習開発部会	東川　安雄	小：宮本 中：○林・岡原・風呂
調査・評価		片上　宗二	広島県 尾三教育事務所所長 奥　典道	調査・評価部会	神山　貴弥	幼：池田 小：○吉原・石井 中：木本・柳生

〈表２　研究開発組織一覧〉

(3) 研究開発委員会

研究開発委員会は，学園長・幼小中三副校園長・幼小中三研究主任・各７プロジェクト部会のキャップから構成され，本学園の研究推進の中心的な役割を担う委員会である。この委員会は，月１回の定例委員会を持ち，各学習開発部会の研究内容の交流や，事務的内容の諸連絡，研究会運営に関する事項の決議を行う。

(4) 運営指導委員会

運営指導委員会は，広島大学及び他大学の著名な先生方，県・地区・市それぞれの著名な教育関係者の方々で構成されている。(表２．研究開発組織一覧参照)

この委員会の役割は，次の通りである。

①国際的コミュニケーション能力の育成を中心とした21世紀型学校カリキュラムの研究開発に関する情報を提供するとともに，研究開発学校の実態を把握し，研究推進に関わる指導・助言を行う。
②研究開発学校が取り組む実践的な研究について，専門的な分野で具体的な指導を行う。
③研究開発学校の研究の進捗情報に基づき，次年度以降の研究開発に向けてのアセスメントを行う。

今年度は，すでに運営指導委員の先生方に，本学園の国際コミュニケーションの研究授業の視察や各学習開発部会の研究構想交流会への参加をお願いし，本学園の第１年次の研究に際して貴重な指導・助言をいただいている。

5 研究計画

(1) 研究計画の概要

この研究開発は３年計画で行い，大きくは次のような研究計画で進めていく。

第１年次	○研究の組織作り ○各プロジェクト部会による研究構想案作成・理論構築 ○各プロジェクト部会の研究構想案に基づく単元開発の試み ○平成15年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○第１年次の研究内容のまとめと評価 ○第２年次の研究計画書及び教育課程の編成
第２年次	○各プロジェクト部会による幼小中一貫教育カリキュラムの作成 ○各プロジェクト部会による評価規準作り ○平成16年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○第２年次の研究内容のまとめと評価 ○第３年次の研究計画書及び教育課程の編成
第３年次	○各プロジェクト部会による幼小中一貫教育カリキュラムの修正 ○各プロジェクト部会による評価規準の修正 ○平成17年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○各プロジェクト部会の３年間の研究内容のまとめと評価 ○３年間の研究内容全体のまとめと評価

(2) 第1年次の具体的計画内容

第１年次は，学園全体及び各プロジェクトにおいて，次のような具体的な研究計画を軸にして研究を進めることにした。

学園全体	○学園内における研究組織作り ○運営指導委員会の設置 ○三原学園教育研究構想案作成 ○第１回運営指導委員会開催 ○研究開発委員会の実施 ○平成15年度幼小中一貫教育公開研究会の開催 ○第１年次の研究内容のまとめと評価 ○第２年次の研究計画書及び教育課程の編成
国際交流学習開発部会・マルチメディア学習開発部会	○広島大学との共同研究による研究構想案作成・理論構築 ○国際的コミュニケーション能力の育成に向けた組織運営および評価方法にかかわる基礎的研究の実施 ○「国際コミュニケーションの時間」の設置と試行 ○国際交流学習・マルチメディア学習の単元開発のための授業研究の実施 ○広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要執筆 ○第１年次の研究内容のまとめと評価 ○第２年次の教育課程の編成
幼小連携学習開発部会	○広島大学との共同研究による研究構想案作成・理論構築 ○幼小連携学習開発の単元開発のための保育・授業研究の実施 ○広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要執筆 ○第１年次の研究内容のまとめと評価 ○第２年次の教育課程の編成
小中連携学習開発部会	○広島大学との共同研究による研究構想案作成・理論構築 ○各教科における21世紀型教科学力の設定 ○小中連携学習開発の単元開発のための授業研究の実施 ○広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要執筆 ○第１年次の研究内容のまとめと評価 ○第２年次の教育課程の編成
教科外学習開発部会	○広島大学との共同研究による研究構想案作成・理論構築 ○教科外学習の単元開発のための授業研究の実施 ○広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要執筆 ○第１年次の研究内容のまとめと評価 ○第２年次の教育課程の編成
クラブ・行事学習開発部会	○広島大学との共同研究による研究構想案作成・理論構築 ○小中クラブの一貫に向けた試行 ○小中連携の自伸会活動(児童・生徒会活動)．学校行事の試行 ○第１年次の研究内容のまとめと評価 ○第２年次の教育課程の編成
調査・評価部会	○広島大学との共同研究による研究構想案作成・理論構築 ○３年間の具体的な評価計画・内容の作成 ○子どもの実態及び教職員の研究の実態の調査・分析 ○第１年次の研究内容のまとめと評価 ○第２年次の教育課程の編成に向けてのアセスメント

6 研究成果の評価

(1) 調査・評価部会の役割

本学園の研究は，7つのプロジェクト部会の中の調査・評価部会が，評価内容及び評価計画を立案し，研究全体のアセスメントを行う。このことにより，国際交流，マルチメディア，幼小連携，小中連携，教科外，クラブ・行事の6つの学習開発部会の研究内容を総合的に考えたり意味づけしたりすることができ，学園全体の21世紀型学校カリキュラムを研究開発することができると考える。また，6つの学習開発部会から独立したかたちで調査・評価部会を設置し，国際コミュニケーション能力を中心とした21世紀型学力に関する子ども達の評価を学力検査，質問紙法などを用いて客観的に評価することにより，学園の内部において本学園の研究を客観的に評価でき，外部評価的な役割を果たすこともできるのである。

(2) 評価の内容

①子どもの実態に関すること

子どもの実態の評価・調査にあたっては，本学園の国際的コミュニケーション能力，21世紀型教科学力，人間関係力について，具体的に次のような内容の調査・評価を行うものとする。

ア． 国際的 コミュニケーション能力	①国際的コミュニケーションのスキルに関すること ②関心・意欲・態度に関すること ③見方・考え方に関すること
イ． 21世紀型教科学力	①基礎学力(不易な学力)に関すること ②学びの関心・意欲・態度に関すること ③各教科部会が提唱する21世紀に新たに必要とされる教科学力に関すること
ウ． 人間関係力	①人間関係調整力に関すること ②人とかかわる意欲に関すること ③社会性に関すること

ア．国際的コミュニケーション能力の評価内容

国際的コミュニケーション能力の評価内容の項目は，①国際的コミュニケーションのスキルに関すること，②関心・意欲・態度に関すること，③見方・考え方に関することの3点である。

次に，その3点の具体的な内容は次の通りである。

「①国際的コミュニケーションのスキルに関すること」の項目では，国際交流学習に関しては外国語会話能力，異文化の人々との人間関係を調整する力などが，マルチメディア学習に関してはメディア活用能力，情報収集力，情報発信力，情報分析力，情報編集力などが，具体的な評価内容として考えられる。

「②関心・意欲・態度に関すること」では，国際交流学習に関しては，外国語会話能力の取得に関する関心・意欲，他の国の人々との交流に対する関心・意欲，人類の抱える問題やその解決に関する関心・意欲，他の国の文化などを受け入れ尊重する態度，自国の文化や歴史・生活などを大切にする態度，様々な人々との共生を求める態度などがあげられる。また，マルチメディア学習に関しては，メディア活用能力の取得に関する関心・意欲，コンピュータ利用リテラシー(メディア倫理)，情報社会に主体的に参加する関心・意欲などがあげられる。

「③見方・考え方に関すること」では，国際交流学習に関しては多文化に対する見方・考え方，マルチメディア学習に関しては情報に関するクリティカルな思考判断力，コンピュータの科学的理解力などがあげられる。

イ．21世紀型教科学力の評価内容

21世紀型教科学力には，現行の学習指導要領などで示されているものを含めた時代が変わっても変わらない不易の学力という側面と，21世紀の新たな社会情勢の進展に対応するための新しい教科学力の側面を持つと考えている。そこで，21世紀型教科学力の評価に当たっては，この２つの側面に関して評価・調査を行うようにする。

具体的には次のように行う。

「①基礎学力(不易な学力)に関すること」では，不易な学力としての基礎学力(主に国語・社会・算数・数学・理科・英語)をＮＲＴなどの標準学力検査を用いて測定し，基礎学力の定着状況の推移をみていく。特に，小学校第４学年から導入している教科担任制が基礎学力の定着・向上に有効であるか，その相関関係を明らかにする。

「②学びの関心・意欲・態度に関すること」では，学びに関する肯定感，学びの達成感，学習者としての自己効力感，学びの発展・深化・継続に関する態度，学びの自律性・習慣に関する態度，未知の対象に対する学習に関する態度などがあげられる。

「③各教科部会が提唱する21世紀に新たに必要とされる教科学力に関すること」については，各教科が独自に評価の観点を設定し調査・評価を行うため，詳細は小中連携学習開発部会および各教科部会の研究構想などをご覧いただきたい。

ウ．人間関係力の評価内容

人間関係力の評価内容の項目は，①人間関係調整力に関すること，②人とかかわる意欲に関すること，③社会性に関することの３点である。

「①人間関係調整力に関すること」の具体的な評価内容は，協力・回避・譲歩・主張などの４つの対処方略や人間関係調整における自己効力感に関することなどがあげられる。

「②人とかかわる意欲に関すること」では，かかわること自体への意欲，人間関係調整に関する意欲，他者理解に関する意欲などが具体的な評価内容である。

「③社会性に関すること」では，対人的行動に対する態度，基本的生活習慣・基本的言語能力，社会的役割遂行のための態度・技能，集団の文化的価値と規範に関することについて，教科外学習開発部会で行っている異校種・異学年交流活動における子どもの感想やふりかえりなどの言葉を分析することで，調査評価を行う。

②６つの学習開発部会に対する評価

調査・評価部会では，子どもに対する調査・評価の他に，６つの学習開発部会(国際交流・マルチメディア・幼小連携・小中連携・教科外・クラブ行事)の研究のビジョンと実施計画に関することについて調査・評価を行うことで，研究の推進に対しての外部評価を学園内部で行えるようにしている。また，調査・評価部会の外部評価に関しては，運営指導委員会などを通じて行う。

(3) 評価計画

①評価実施の対象学年

小学校第３学年，小学校第５学年，中学校第１学年，中学校第３学年の４つの学年を対象とする。

この対象学年の設定は，次のような理由による。

・小学校第３学年は，幼小連携の最終学年である。そこで，幼小連携における研究の成果や課題を明らかにするとともに，小中連携のスタート時点での子どもの実態としてとらえることができる。
・中学校第３学年は，私たちの研究の最終学年としての評価と考える。
・小学校第５学年と中学校第３学年は，上の２つの評価学年から見て，バランスよく１年おきに評価できるように設定する。

②各年度の調査・評価実施時期

実施時期は，６月中旬および２月下旬を予定している。ただし，第１年次は，１回目の調査・評価時期

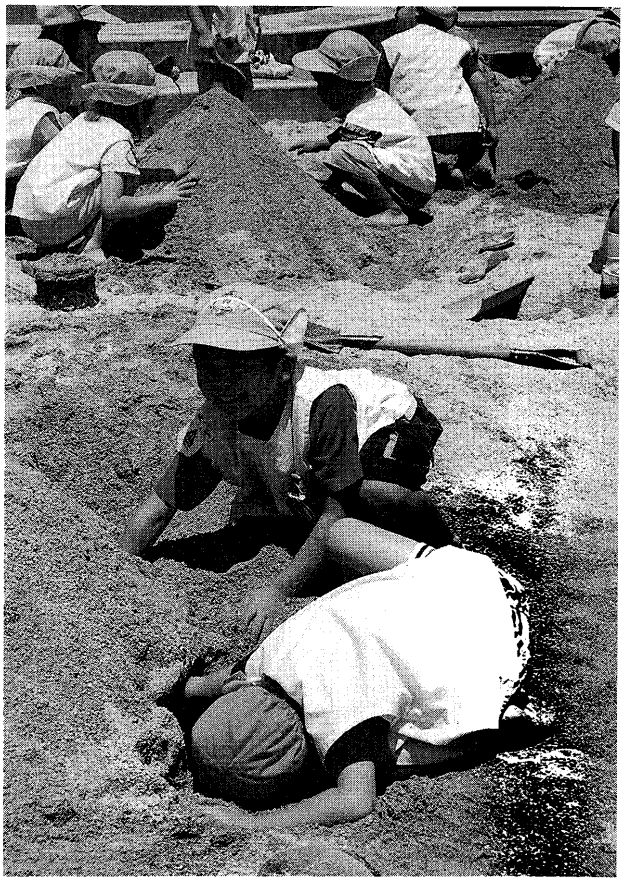
を，各プロジェクト部会の研究の進行状況に合わせて行う。また，第３年次は研究のまとめの年次にあたるため，12月下旬に行う。

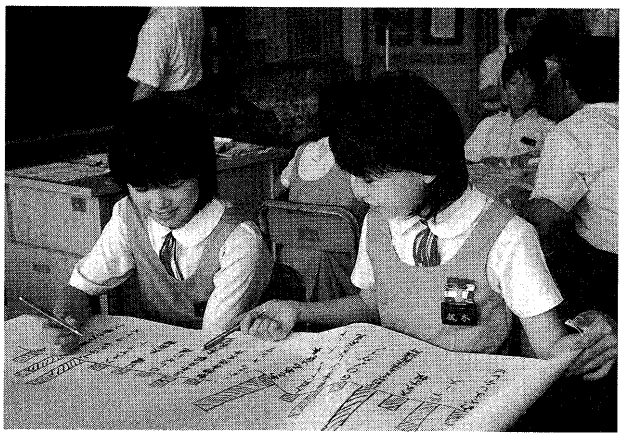
③３年間の評価計画

第１年次	○６．（２）に示した内容に対する実態把握
第２年次	○６．（２）に示した内容に対する学力向上の実態把握
第３年次	○６．（２）に示した内容に対する学力向上の実態把握 ○３年間の変容の調査（12月下旬）

第三章　各プロジェクトの研究構想

第１年次の研究の推進にあたっては，７つのプロジェクト部会において，それぞれのプロジェクトごとの研究構想および計画などを立案し，実践を行った。ここでは，各プロジェクト部会の研究構想を記載する。各教科の教科構想や実践事例，調査・評価報告については，別添の資料をご覧いただきたい。





子ども達の姿